

黒部川竹蛇籠保存会

— 約400年受け継がれる黒部川の伝統治水技術 —



黒部川総合水防演習

たけじゃかご

竹蛇籠とは、割り竹を編んで作る円筒型のかごのことで、中に川原石を詰めて、河川護岸や用水口の堰(せき)などに利用されてきました。

細長い形が蛇に似ていることから、この名がついたとされています。

発祥は中国で、日本への伝来時期は不明ですが、「古事記」にも登場する由緒ある技法です。

竹は成長が早いので手に入りやすく、しなやかで石を詰めやすいため、蛇籠といえば竹製が主流でしたが、現在では鉄線製が多く使われています。

黒部川竹蛇籠保存会

2 急流河川黒部川と竹蛇籠の歴史



竹蛇籠と川倉を投入した水防活動（昭和34年）

●黒部川の治水と竹蛇籠

黒部川で本格的な治水工事が始まったのは、佐々成政が新川地方を治めた天正年間（1580年頃）と言われています。昔は、四十八ヶ瀬と呼ばれる分流を川倉でせき止めて、それぞれの集落に必要な用水を引き入れたり、また、洪水に備えて霞堤を築きましたが、そうした工事に欠かせなかったのが竹蛇籠でした。

●竹蛇籠とデ・レーケとの関わり

竹蛇籠は、約400年前から黒部川で使用されてきた伝統的な工法です。

明治時代、オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケが黒部川を調査した際、この竹蛇籠工法を高く評価し、治水計画に採用しました。

その後、近代治水の基礎として広く活用され、昭和40年代頃まで黒部川の治水を支える重要な工法として用いられました。



ヨハネス・デ・レーケ
(1842～1913)

保存会設立の経緯

約400年受け継がれてきた竹蛇籠工法の技術継承と研鑽に努めています。

竹蛇籠の製作は、親から子へそれぞれの家の技として引き継がれてきたため、職人の数は限られてきました。加えて、工事の機械化や職人の高齢化に伴い、技術の継承が大きな問題となってきました。

昭和61年、建設省北陸地方整備局（当時）等の主催で実施された神通川総合水防演習で、黒部川沿川の竹蛇籠職人6名が実演したところ大好評であったことから、この伝統技法を守ろうとの機運が高まり、同保存会が発足しました。

現在は若手中心（14名）に、技術の継承と研鑽に努めています。



●竹蛇籠が選ばれた理由



流水への柔軟な対応

竹のしなやかさと籠構造が、流水の力を受け流し、洪水時の衝撃を和らげ河岸を保護します。



自然環境との調和

竹と石という自然素材を使用することで、景観や生態系等との自然環境と調和します。



高い透水性と安定性

籠内の石材のすき間から水が通り抜けるため堤体内の水圧を軽減し、崩壊を防ぎます。



施工性と経済性

材料が軽量で加工・運搬しやすく、現地での施工も比較的容易で、コストを抑えられます。



地域資源の活用と持続性

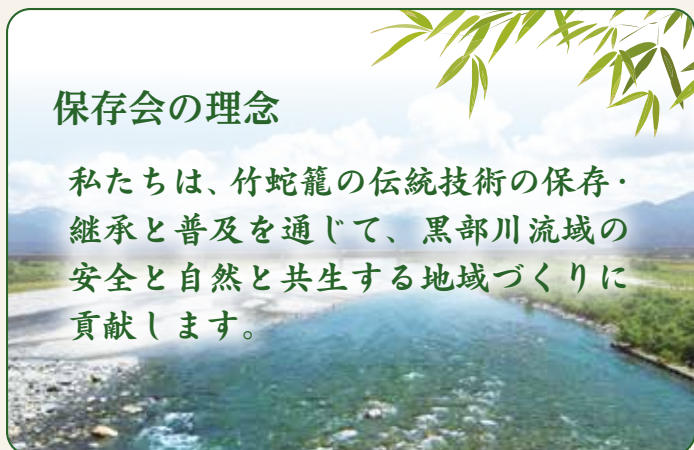
身近にある竹を活用し、地域の人々の力で維持・補修が可能で、持続可能な工法です。

黒部川竹蛇籠の歴史（年表）

- 約400年前（江戸以前）
黒部川で竹を編み、石を詰めた竹蛇籠が護岸工法として使用される。
- 江戸時代
地域の知恵と技術として定着。
- 明治時代
オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケが黒部川の治水に竹蛇籠工法を採用。
- 昭和40年代頃まで
黒部川の治水を支える重要な工法として広く使用される。
- 平成以降
練石張やコンクリート護岸の普及により竹蛇籠工法は次第に姿を消す。
- 現在
黒部川竹蛇籠保存会が技術の継承と普及に取り組んでいる。

保存会の理念

私たちは、竹蛇籠の伝統技術の保存・継承と普及を通じて、黒部川流域の安全と自然と共生する地域づくりに貢献します。



3 竹蛇籠の作り方 —受け継ぎたい割り竹を編んで作る伝統技法—

1. 材料及び道具



竹は周長12～18cmのものをを用いる。
道具は、①ハンマー、②鉋、③コマ、を使用し、作業時には④皮手袋、⑤前掛けを着用する。

2. 竹割



割り竹の幅が2.0～2.5cmになるように、コマを使い分けながら割る。
籠編み作業で竹を継ぎ足しやすいように、根元の部分の内側30～40cmを削ぎ落とす。

3. 籠の底編



底編から作りはじめる。
蛇籠の直径によって編み竹の本数を変え、正六角形にしっかりと編み込む。

4. 輪竹をかける



底編が出来たら輪竹をかけて、筒となる部分を編み込む作業に入る。

5. 筒を編み込む



輪竹の一方を編み、もう一方を輪竹にしながら、筒を編んでいく。

6. 口止め



竹蛇籠を所定の位置まで編み進めたら、輪竹を編み竹に沿わせて編み戻します。
ほかの編み竹も、網目が正六角形になるように形を整えて固定します。

7. 完成



技術のポイント

- ・竹は乾燥しすぎると折れやすく、湿りすぎると編みにくい。適度な水分を保つことが重要。
- ・竹の向きや曲げ方を工夫することで、強度と柔軟性を兼ね備えた構造になる。
- ・編み込みは美しさだけでなく、流水に対する抵抗を考えた技術である。
- ・熟練の技が必要で、長年の経験が品質を左右する。





技術の継承

熟練の技を次世代へ伝えるため、経験豊富な会員が丁寧に指導し、確かな技術を受け継いでいます。



国土交通省との連携

黒部川の安全・安心を守るため、国土交通省と連携し、伝統技術の保存と活用に取り組んでいます。



若手育成

若い世代が誇りを持って技術を受け継げるよう、実践を通して技術者や担い手の育成に力を注いでいます。



地域の防災訓練への参加

(最近：黒部川総合水防演習)

地域の防災訓練（最近：黒部川総合水防演習）に積極的に参加し、地域とのつながりを大切にしています。



未来へつなぐ竹蛇籠

黒部川は、これまで多くの氾濫を繰り返す一方で、私たちの暮らしを育んできました。

その中で先人たちは、竹のしなりと石の重みを活かした「竹蛇籠」を生み出し、川と向き合い、ふるさとを守り続けてきました。

私たちはこの貴重な技術を次の世代へ確実に伝え、未来の安心・安全な地域づくりに貢献します。

先人の知恵を未来へ。地域の宝を次世代へ。



黒部川竹蛇籠保存会とは

黒部川で受け継がれてきた伝統的な治水技術「竹蛇籠」の保存・継承と、普及啓発を目的に活動する団体です。

昭和40年代頃まで黒部川の治水を支えた竹蛇籠工法を、未来へつなぐために技術の伝承やイベント開催、地域との交流に取り組んでいます。

主な活動内容

- ・竹蛇籠の製作・技術伝承
- ・国土交通省との連携・協力
- ・黒部川総合水防演習への参加
- ・黒部川水防工法研修会の参加

会長挨拶

私たちは、先人から受け継いだ竹蛇籠の技術を大切に守り、次の世代へとつないでいくことを使命としています。

黒部川の安全を守り、地域の未来に貢献できるよう、これからも活動を続けてまいります。



黒部川竹蛇籠保存会
会長 高村 克宏

お願い

**技術・材料の無断使用は
ご遠慮ください。**

竹蛇籠の技術や形状、写真等の無断使用は、保存会の活動に影響を及ぼす可能性があります。ご利用をご希望の場合は、事前にご連絡ください。

